１．協和の歴史

協和地区は錦江湾岸の海潟と中俣の２つの大字の地域で構成され、協和小学校の校歌にも「みどりにはえる江ノ島のながめさやかに青い海」とあるように、風光明媚な土地です。

また、北は桜島口の戸柱神社から南は荒崎パーキングまでの国道 220 号線沿いに約 6 キロメートルにわたり集落の家並みが続いています。協和地区に人々が住みついたのは一番古い資料としては、協和小学校校庭東北隅から縄文式土器及び遺跡が発見され、同時に打製石器類や土師器、須恵器、獣骨なども発見されています。このことから数千年前からここに人々の生活が営まれていたことがうかがえます。

貝の化石

昔から海潟の崎山集落の山手では「貝の化石」が掘り出されていましたが、国鉄大隅線の建設に伴って今では発掘するのが出来なくなっています。ここは海底が隆起して陸地となり、当時生息していた貝がそのまま化石となったもので、一説に海潟の名はこの貝形から出たものと言われています。

垂水の名が歴史の記録に現れるのは保安元年（１１２０）、宇佐八幡宮から藤原上総介舜清が元垂水の荒崎城に来てからのことです。

寿永４年（１１８５）、壇ノ浦の戦いで源氏に敗れた平家の落人は九州各地に逃れていきますが、中俣の浦谷集落は落人の里の言い伝えや、落人の墓が残されています。

石井氏の墓

その後、この協和の地域は１２世紀末に中俣氏、１４世紀末に石井氏に支配されますが、海潟、中俣もあわせて垂水の名称を冠せられるようになったのは伊地知氏等が支配してからです。（天文５年【１５３６】、８代伊地知重武が下大隅垂水を治める）なお、海潟の菅原神社は学問の神様、菅原道真を祀ってありますが、伊地知氏によって建てられたという説もあります。